明治大学校友会名古屋地域支部会報誌

# MU News

Meiji University News

2020. 7

Vol.39

# 令和2年 愛知県支部総会 講演会・懇親会

初の中止

## 来年、元気な笑顔で集まりましょう!!

令和2年6月7日に名古屋東急ホテルにて、愛知県支部総会・講演会・懇親会の開催を予定していましたが、新型コロナウィルス感染拡大防止の観点より、永い歴史の中で初めての中止となりました。来年は大勢の皆様とスクラムを組み、“おおメイジ～♪”を熱唱しましょう!

### 主な大学スポーツの状況

**◎東京六大学野球　春季リーグ**
5月下旬開催を再延期し、8月に1試合総当たりのリーグ戦開催を目指す

**◎全日本大学野球連盟**
8月に予定していた第69回全日本大学選手権（神宮球場）の中止を決めた…史上初

**◎関東ラグビーフットボール協会**
関東大学春季大会（4/19～6/21）と関東大学オールスター（6/28）の中止を決めた

**◎関東学生陸上競技連盟**
関東インカレ（5/21～5/24）の開催中止
第52回全日本大学駅伝関東地区推薦校選考会は中止となり、代替選考方法は調整中

Meiji University News　年2回／5月・11月 発行　発行日：2020年7月　発行所：明治大学校友会 名古屋地域支部　編集：広報委員会
〒460-0012　名古屋市中区千代田五丁目7番5号 パークヒルズ千代田 8F TEL 052-243-6112 FAX 052-243-6130 http://aichi.meiji-shikon.net



# 新型コロナウイルス感染症に関する明治大学の対応をご紹介します！

**【学生生活の状況】**

**○学校生活全般については？**

「明治大学活動制限指針」を元に学生がどう動けば良いのかが示されており、活動制限は、制限の軽いものをレベル1とし、最も厳しいレベル5までの5段階に分けられております。

※7月1日現在は、レベル2

「授業・教育活動」「研究活動」「学生の入構　課外活動」「窓口業務」「施設貸出」「各種会議」について、それぞれ5段階ごとに制限が定められており、学生目線で見ても分かりやすいものとなっております。

**○春学期の授業および春学期定期試験は？**

授業は、7月中までオンライン授業の実施となり、制限レベル2に引き下げられた場合、一部対面授業を開始する場合もあります。

試験については、対面形式の筆記試験は行わず、これに替わる試験もしくは課題を課すこととしております。

**我が母校はオンラインライセンス2,700人分を取得し何とか授業を継続するよう努力されておりますが、自分の学生生活は授業を受けるというより遊び相手を見つけに学校へ行っていたようなものでした。「行ってはならない」状況は大変辛いことでしょう。**

**【学生への支援】**

**1. 学費延納制度**

家計の急変等の事情により学費納入期限までの納入が困難な場合に延納制度が利用できます。

**2. 奨学金制度**

（1）予測できない事由により家計が急変し、緊急の支援の必要がある方で、急変後の所得の見込みにより給付奨学金および授業料等減免の要件を満たした学生に支援「給付奨学金（給付型）」
（2）家計が急変した学生に支援「緊急採用・応急採用（貸与型）」
（3）在学中の家計急変および経済的に困窮し学修の継続が困難な学部生に対し、授業料年額の4分の1相当額を支援「明大サポート奨学金（給付型）」
（4）在学中の家計支持者死亡により家計が急変した学生に支援「明治大学連合父母会特別給付奨学金（給付型）」
（5）民間団体・地方公共団体奨学金（給付型・貸与型）
（6）明治大学・金融機関提携「教育ローン」
（7）国の教育ローン・教育支援資金

**学校独自で様々な支援制度が設定されております。今後は国の支援も追加される動きもありますが、校友会としても支援金を寄付するなど、学生を分断させない体制を目指します。**

**☆「新型コロナウイルスの影響を受けた学生への緊急支援資金」へご協力ください！**

左より
大六野学長
柳谷理事長
北野校友会長

鼎談　緊急支援金

**編集後記**

新型コロナウイルス感染症の影響により、史上初の県支部総会中止という未曾有の体験を強いられた校友の皆さんのお気持ちを察すると、言葉に表せないほど、残念な思いが過るばかりです。来年こそ、校友相集って、校歌を大合唱できることを祈り、編集に向き合いました。その来年は、総会はもちろん、マンドリンコンサートも企画しています。今年の分まで、盛り上がり、母校創立140周年に向けて、校友一丸となる2021年に仕上げていきたいものですね。MUNewsが、その一助となれば、幸いです。

**名古屋地域支部年会費の振込先**
［郵便振込］ ※振込料は会員負担です。
年 会 費／ ￥6,000
口座番号／ 00830-1-72587
加入者名／明治大学校友会名古屋地域支部
※加入者名義変更にご注意ください。

お問合せ先
**名古屋地域支部事務局**
〒460-0012
名古屋市中区千代田五丁目7番5号
パークヒルズ千代田 8F
日本ゼネラルフード株式会社　総務部内
TEL:052-243-6112
FAX:052-243-6130

**校友会愛知県支部**
**ホームページ広告バナー広告**
**協賛企業大募集**

タイムリーな情報発信で、
校友の絆を深めています！

ホームページアドレス:http://aichi.meiji-shikon.net
ホームページに関するお問い合わせ
広報委員会：加藤　090-8738-3530

特集

# アフターコロナの新しい習慣「ステイホーム」「母校に関する本を読もう」

その1.

## おお、明治　白雲なびく―校歌誕生物語 40万人のIDENTITY

**軍司貞則著　発行所・駿台倶楽部　発売所・廣済堂出版　2000年10月20日初版**

「明治大学の校歌を作ったのは、たった3人の現役学生だった!」

校友の誰もが、歌い継いできた我らが校歌「白雲なびく駿河台」
その誕生は、今からちょうど100年前、1920年（大正9年）のこと。
3人の学生が奮闘した末に、生み出したものでした。

「校長先生、なぜ校歌をお作りにならないのですか。なぜ明大には校歌がないのですか」
明大商科代表・武田孟（後の総長）は、大学トップ（当時の明大では、最高責任者を校長と呼んでいたそうです）の木下友三郎に迫りました。

きっかけになったのは、当時の花形、毎年隅田川で行われる大学対抗ボートレース。他校が独自の応援歌で盛り上がる中、明大には、歌うべき歌がありませんでした。
そして、一人の学生が、直談判し、校歌づくりの権利を勝ち取ったところから、物語が始まります。

3人の学生とは、武田孟、牛尾哲造、越智七五三吉。彼らは、大学側の全面的バックアップを取りつけ、教授の紹介で、熱血詩人とうたわれた、児玉花外を訪ね、作詞を依頼します。
ほどなく、児玉からあがってきた歌詞でしたが、作曲を担当する山田耕筰が気に入りません。そして、山田は、児玉の了解を得たうえで、詩人西條八十に改稿を依頼し、現在の原型となる歌詞が誕生します。実は、その西條八十は、都の西北の卒業生だったとは・・・

著者のノンフィクション作家・軍司貞則（ぐんじ　さだのり）さんは、文学部演劇科卒業の校友です。あとがきでは、母校愛とともに、ノンフィクション作家としての、矜持が感じられるメッセージが添えられています。
「早稲田には尾崎士郎の人生劇場がありますよねえ。しかし明治にはない。校歌づくりにまつわる無名の若者の人生劇場を書けばいいんじゃないですかねえ・・・人生劇場はフィクションです。私はノンフィクションのモノ書きなので、事実に即したことしか書けないので地味になるかもしれません。・・・」

残念ながら、現時点で絶版となっていますので、中古マーケットでの調達となりますが、校友なら是非とも、手に採っていただきたい、逸品です。

明治大学のWEBサイトにも、校歌誕生にまつわるエピソードが掲載されていますので、そちらも、ご参考くださいませ。

https://www.meiji.ac.jp/koho/information/schoolsong/origin.html

校歌「白雲なびく駿河台」（作詞児玉花外・作曲山田耕筰）は、数ある校歌のなかでも屈指の、大学校歌らしい歌として知られ、明大関係者はもちろんのこと、世の中の多くの人々に親しまれている。こうなるともう、国民の貴重な共有財産である。それに、歌詞にも曲にもロマンがあって、いかにも明治大学にふさわしい。
文責：櫻山貴文（広報委員会）

2020年総会議事審議承認

※2020年度愛知県支部総会ならびに名古屋地域支部総会については、総会議案事項承認のため、2020年6月2日（火）、役員、及び、常任幹事会メンバーに限定し、縮小して開催し、審議事項につき、全て可決承認されたことをご報告します。



その2.

## 前へ　北島忠治（僕が明大ラグビーに求めたもの）

**編者：明治大学ラグビー部、発行所：社団法人　社会経済国民会議　初版発行：1989年12月25日**

○北島ラグビーは、教育哲学の具現でもある。そこにラグビーを通じての人間教育そのものがでてくる。これこそ敗戦によって失われた人間教育の本質が内蔵されていると痛感した。まさに今の日本に一番欠落している「知的野蛮人（インテリジェント・バーバリアン）」の養成である。

○流浪の日々ーグランドを求めて（創部当時はグランドの確保に苦労していた）
早稲田OBの平沢進一さんが豊島園に務めていて話をまとめてくれたんだ。いや、うれしかったね。何しろ明治のOBじゃなくて早稲田のOBが一生懸命やってくれたんだから。これがラグビーの「ノーサイドの精神」なんだ。試合が終わってノーサイドの笛が鳴ったらもう敵も味方もないんだ。**部は創立したものの一番困ったのは練習場だった。当時もなかなか空地がなく本当に苦労した。**

○まず食糧づくりから（明大ラグビー部の戦後は八幡山グランド整備と農耕作業から始まった）
ラグビーをやることが目的だったけどそれどころじゃなかった。どうやって食うか。どうやって生きるかが大問題だったんだ。
**自分のものは自分でつくるとして自立精神を養うというラグビー精神にも繋がった。**

○「前へ」それが僕たちのラグビーだ
ステップの一つも覚えれば、楽に相手をかわせるかも知れない。しかし、ラグビーの本質は、ぶつかり合いのスポーツ。ぶつかり合いで勝てない奴がステップを覚えても、ラグビーの本質からはずれているような気がするんだ。長い人生、本当に大きくて深刻な問題と直面した時は、体当たりで乗り越えていくしかない。それには常日ごろから何事にも体当たりで進むよう心がけていなければならないと思うんだ。いつものクセで、かわしてやろうなんて思っていたら足もとをすくわれて、きっと痛い目に合うだろう。
**多くのラグビー思想が育てあげられてきたが、明治のラグビーは70年近く創部時代と全く同じ「前へ」をテーマにしている。**
**これは明大ラグビー部のテーマであるとともに北島監督の人生に対するテーマでもある。**

**30年以上前の書籍ですが、明大ラグビー部の創成期から培われた北島イズムを最もわかりやすく解説したものであり、ラグビーを通じた人材育成に生涯をささげられた生き様を描いたものでした。特に戦時中の中断から戦後の復興のくだりは、コロナに苦しむ現在の日本への力強いメッセージとして今なお背中を押していただいているように感じるものでした。また、2019ラグビーワールドカップでの日本代表の快進撃は、体格で劣る日本が技で如何にして勝つかという従来の考え方から、あくまでぶつかり合いで勝たなければならない競技であるという本質に立ち返った結果がもたらしたものなのだと改めて思います。なお、「明大ラグビー部、復活への軌跡」と読み比べてみますと、ラグビーを格闘技と捉えていた「前へ」をスポーツに再定義したというくだりが、今の明大ラグビー部の復活を最も端的に表していることがわかります。**
文責：村上慎二郎（広報委員会）

その3.

## 明治大学ラグビー部、復活への軌跡 勝者の文化を築け!監督・田中澄憲の「改革戦記」

**著者：永田洋光、発行所：㈱洋泉社、初版発行：2019年12月11日**

2019年1月、明治大学は天理大学を破り13回目の優勝を遂げた。
それは22年ぶりの優勝だった。
その裏には2017年から母校のヘッドコーチに就任し、2018年にシーズンより監督に就任した田中澄憲の存在があった。「僕にとっての『前へ』は、プレースタイルではなく、ラグビーに取り組む姿勢であり、生き方を支える理念なんです。そうした姿勢でラグビーと向き合って勝つことが、なによりも明治の伝統を伝えることだと思います」

○明治大学ラグビー部のポリシー
明治大学ラグビー部にとって、永遠に揺るがぬ「師」とは、1996年に亡くなった北島忠治監督である。「北島イズム」は「前へ」があまりにも有名だが、このクラブを理解するためには、深遠な哲学めいたこの言葉よりも、もっと重要なポリシーがある。
それが、「キャプテンシー」と「自主性」である。

○田中監督の学んできた方法論のベース
田中監督が北島先生に最後に指導されたときに1年生だった。何も言われた記憶はなかった。
田中監督はラグビーが完全にアマチュアであった時代にサントリーに入社し、トップリーグ発足を経て、ラグビーの質がぐんぐん上がっていく時代を経験している。その過程でエディー・ジョーンズの影響を受けた。エディー・ジョーンズは、サントリーがトップリーグへと移り変わる過程で、チームのなかにひとつの文化を根づかせた。日常的にどういう態度でラグビーに取り組み、どういう問題意識を持って日々の練習と向き合えば最終的に勝利をつかむことができるか ― そうした細かい日常での過ごし方やふるまいが、チームとしての文化を築いてきた。そうした文化を、ラグビーでは「ウィニング・カルチャー（勝者の文化）」と言う。

○ウィニング・カルチャーが根づいたチームの選手たちは、どんなに息が切れ、肉体的に苦しくとも、膝に手を置いて下を向いたりはしない。肩で息をつきながらも顔を上げ、次のトレーニングに向けて気持ちを集中させる。

2019年の練習風景に始まり、春季から秋季中盤の臨場感のある試合の描写。また、田中監督の主将時代の経験から「前へ」の再定義、そして、滝沢・伊藤両コーチ、選手の目を通した復活への要因が語られており、2020年1月決勝では早稲田には敗れはしましたが、自主性・向上心を持った明治大学ラグビー部員には今年も大いに期待できると思います。新型コロナウィルスの影響で秋季リーグ以降どうなるかが心配ではありますが、主将・箸本龍雅（4年・商学部、東福岡高出身）が「キャプテンシー」を発揮し、2021年1月には今年のリベンジを果たしてくれるでしょう。今から大学ラグビーシーズンが楽しみです。
文責：近藤政典（広報委員会）